

10月号では、国宝源氏物語絵巻に描かれた薫の「五十日(いか)のお祝い」と、御簾の下からこぼれ出る装束についてみていきます。

「源氏物語絵巻」 柏木(三) の原本は、名古屋の徳川美術館に所蔵されています。今回は、国立国会図書館に所蔵されている模本でみていきます。

●薫を抱く 光源氏と畳

画面の中央で赤子を抱いているのが光源氏です。この赤子は、女三の宮と柏木の不義の子であり、光源氏は妻の不義の子を抱き、思い悩んでいる様子がうかがえます。



図1「源氏物語絵詞」2 和田正尚模写、 明治44(1911) 年(国立国会図書館蔵)

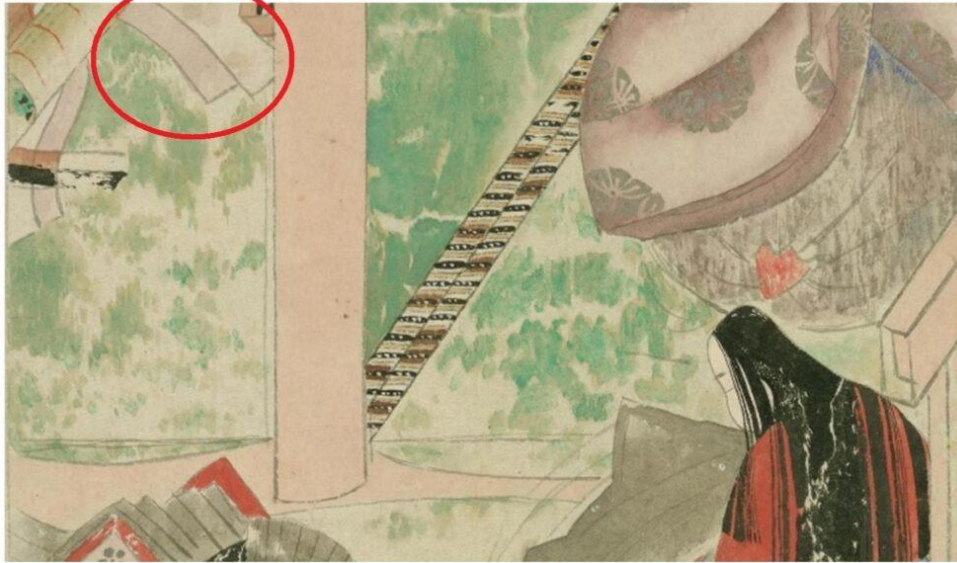
この日は、薫が誕生してから五十日の五十のお祝いでした。横には朱塗りの丸高杯(まるたかつき)が並んでいます。

光源氏は畳に座っています。平安時代は、このように板敷に畳を置いて座り、寝たりしていました。縦縞の畳縁は、縹縷縁(うんげんへり) で、皇族に使用する畳とされています。この当時、准太上天皇(じゅんだいじょうてんのう)の位を授けられた、光源氏の身分にふさわしい畳です。

光源氏の座る畳は、よくみると短辺の方がまるくたわんでいます。この当時の畳は、現在よりも柔らかくふんわりとしていたという説があります。

●薫の母、女三宮の存在

光源氏の左横には、白い布のようなものが描かれています。(赤い丸で示しています。)



これは、几帳の布、あるいは、高貴な人の寝所である御帳台(みちょうだい)で、女三宮の存在を暗示しているという指摘もあります。

光源氏の兄・朱雀院の皇女である女三の宮は、光源氏が40歳の時に、わずか14歳で降嫁(こうか)し、六条院春の御殿の寝殿に住むようになりました。女三の宮にかしづく女房のために、春の御殿には、西対2つが増築されました。新しく御殿に来た年若い女三の宮の存在に、紫の上は苦悩したことでしょう。

●御五十日の打出

御簾の下に目を転じてみますと、御簾の下から女房の袖口と棲(つま)が出ています。この連載で紹介してきた打出(うちいで)のしつらいです。



部屋の中にいる後ろ向きに座った女房の装束が出ているのでしょうか。

着装が専門の武田富枝氏は、「部屋の中にいる女房と、御簾の外の打出は、別の物」の可能性を指摘しています。あたかも女房が座っているかのように、打出はすのこに出されていることが重要です。

図2『山槐記』(4)写本、中山忠親(国立国会図書館蔵)

『山槐記』指図と「源氏物語絵巻」が描く御帳台・打出・縷縷縁の畳は共通しています。源氏物語絵巻は、絵画が制作された当時の12世紀の表現を描いたことがうかがえます。

国宝源氏物語絵巻に描かれた打出のイメージは、「駒競行幸絵巻」(和泉市久保惣記念美術館蔵)とともに、平安時代のはなやかな建築空間のイメージを形づくってきたといえるでしょう。その後、赤子であった薫は成長し、物語の舞台は宇治へと移りかわり、『源氏物語』のお話は続いています。

〈秋季特別展のご案内〉

現在、徳川美術館・名古屋市蓬左文庫で、秋季特別展 みやびの世界「魅惑の源氏物語／宮廷文化の華」において、「復元装束による打出の再現」(民族衣裳普及文化協会蔵)が展示されています(2024年9月22日(日曜日)から11月4日(月曜日・振休))。この連載で紹介させていただいた打出の実物です。この機会にご覧いただけたら幸いです。<https://www.tokugawa-art-museum.jp/exhibits/planned/2024/0922-2/>

打出は、文化庁の助成を受けた王朝文化体感プログラム協議会で製作しました。(2021年に三重県斎宮歴史博物館、2024年春に東京富士美術館で展示していただきました)。



図3 民族衣裳文化普及協会蔵

【主な参考文献】

- ・赤澤真理『御簾の下からこぼれ出る装束—王朝物語絵と女性の空間』(ブックレット書物をひらく 19、2019年)
- ・『国宝源氏物語絵巻』(五島美術館、2010年)

【引用図版】

- ・図1 「源氏物語絵詞」2 和田正尚模写、明治44(1911)年(国立国会図書館蔵)
- ・図2 『山槐記』(4)写本、中山忠親(国立国会図書館蔵)
- ・図3 民族衣裳文化普及協会蔵